



花嫁の型

永代美知代

「五千圓の結納ですつて」
「金の世の中つていふが、ほんとうです
ね。」

萩原様ともあらう舊家の嬢様が、一代
者の新見風情へ嫁らつしやる」

斯うした噂さがバツとして、それから
二十日ばかり後の或る夜の宵暗に、新ら
しく迎へられて新見家の人となるべく、
十八の里子は思ひ切つてこつそり、川舟
に乗り込みました。送つて行く父も母も
この年頃の貧しさみすばらしさに引代へ
て、黒羽二重の紋服姿晴れ々しく、わ
けても、今日花嫁の美しさは猶更で、紫
紺縮緬の三枚重ねに、西陣錦の華やかな
桂さへ着けました。

「何云ふまア見事な！」
出来るだけ秘密に、いよ／＼と云ふそ

の目を隠すやうにして居ただけれど、
斯うした事は兎角に洩れ易く、一足先き
に渡船場まで出掛けて居た見物達は、一
齊にその仕度の美々しさを感歎せずには
居られなかつた。

「五千圓の結納ばかりぢや無い、まだそ
の上、何から何まで、仕度は皆な京の高
島屋へあつらへて、ちやんと新見でした
んださうです、美しい筈ですわね」

聞えよがしに云ふ者もありました、若
い里子は流石にさうした囁きを正面に聞
くに堪へません。薄紅に一層あてやかな
面を打伏せて、消え入り度い恥しさを
感じもしましたが、最初の決心を思ひ返
すと、世間の取り沙汰など何のそのとさ
うした氣にもなりました。

東京でお育ちはなる方々に斯うした事は或は

お解りにもなりますまい。ですが田舎ではまだ、
封建時代の思想も餘程残つて居て、やれ彼家は何々
の格式の家柄だ、舊家だ名門だ、とたゞそれだけで
たとへどんなに零落しましても、立派に人から立て
られもし「旦那々々」と敬慕もされるのです。そして
それと反對に、どんなに金がありましても、門地が
それに伴はない以上、成り上り者、一代富限と、一
口になされて、てんで人が相手に致しません。
さうした譯から名門の萩原家に生れた里子は、一代
者の新見家から強て所望もされた。

家柄を賣つて、五千圓と云ふ金の爲めに、自分の
一身を犠牲にしなければならぬ——斯う考へた時、
里子は堪らなく嫁でした。ですが里子は思ひ返す處
あつて、その縁談を承諾したのです。無理と知りな
がら貧しい餘りに泣いて頼んだ父も母も、案外い
ない娘の得心を夢かとも喜びました。
斯う云ふと今の新らしき女の方々は、何だくだら
ない、そんな平凡な女の話を聞く度くもない、
と仰有るでせう、さう平凡、さうかも知れませんが、
ですが又里子は非凡な女でなくもありませんでした
う。

「新見の嫁さん位よく出来た嫁御はない
でせう。毎晩々々一晩かゝさず、あの土
百姓夫婦の足腰をもむんださうです、

舅姑ならこそです、勿體ない、罰が當る」
 里子が新見の嫁になつてから、その舅姑への事へ振りには、どんなに立派であらうともそれは、勿論當然の事として、私は今それを此處に誇らうと云ふのではありませぬ。ですが世間では、家柄を賣つて嫁いだ程の里子は、定めし何彼が我儘で、ともすれば實家の門地を鼻にかけ、下賤な生れの舅姑を苦しめもするだらう、と斯う考へても居たでせう。
 それがその豫想とはすつかり反對なので餘計に目立つて感歎もしますので。兎に角萩原様の嬢様たる里子が一代者の舅姑の足腰をもむと云ふ、それをさもく破天荒な事でもあるやうに思つたらしい。
 だが嫁としての里子の行はそれ處ではありません、百萬といふ今の身代になつた後もやつぱり、茄子や胡瓜に肥料をくむ以外には、何一つ知つた事もない舅姑に事へて、出入りには一々下駄を揃へて、傘までさしかけて手渡しました。
 と云つた處で、何の譯もない事のやう

ではあります、次ぎから次ぎへ、乳呑兒の絶え間もなく、十二人と云ふ子供の母親になつてゐる里子が、忙しい家事に追はれながら、人手も借りずに、それだけの事をしてのける、おまけに舅姑は頑固で、たとへ里子を塵箱に天降つた鶴のやうにも有難がつて居るにした處が、何彼も彼も人まかせに、多勢の召使共を顎で使ふ東京の富豪のやうな眞似は、夢にも出来ない身の上です、さうした家庭に居て、里子がそれだけにしようといふ、その氣配りだけでも、尋常一通りではありますまい。
 『家の嫁位感心な者はありませんよ』
 斯う舅姑から云はれる里子は、百萬圓と云ふ財産家の若奥様ともあらう身を、眞夏の暑い日盛りに、玉なす汗を流して洗濯物を干したり入れたり、雇人に先立つて立働いて居るのでした。
 『萩原が丸焼けた』
 斯うした報知が傳ると、里子は我ともなく取り亂して歎かすには居られませんでした。素より里子は

五千圓の金に眼がくれて、この新見の家に嫁いだではありませぬでした。だが萩原の父母は、貧から死なれたばかりに、最愛の我手を賣物にした、とまあ、さうした形にもなりますもの、さうした辛い思ひをして、やつと得た五千圓でもつて、倒れかけた家を改築したりなど、折角喜んで居たものを、一朝烏有に歸し去つては、どんなにかがっかりしてどんなにか情けない思ひをして居られよう？
 『ナアニもう心配さつしやるな、私が悪いやうにはしませんで』
 舅は嫁を慰めて斯うも云ひました。
 『有り難う御座います、ですがそれで餘り御迷惑をかけすぎます』
 里子の辭退するの聞かないで、それから間もなく萩原家は新しく普請に取りかゝる事になりました。
 棟上げの式日に、田舎では棟領は幾ら、大工に幾ら、石工に幾ら、左官に幾ら、とちやんと定つて、米だの重の物などを遣はして、盛に祝杯をあげた上、米、金銭、餅、反物、その他色んな品物を屋の棟から投げ散らし、誰彼の差別なく勝手次第に拾はせるのが昔からのしきたつた習慣ですが、萩原家の棟上げの時、米だの何だの、さうした品物を積み立てた駄馬の數と云つたら數へ切れ程澤山、新見家から萩原の家まで、六里が間引切りなく、米を

買ふた馬の姿が絶えませんでしたとか、さうした風評が専ら立ちました。
 『大した勢ですわね』
 『焼けて結局立派になつたわけ、善い娘は持ち度いものぢや』
 『さうよ、どんなに立派にしてあげたつて、嫁御の心掛けが善いから、新見のお爺も惜しい氣はないでせうよ』
 善い娘は持ち度いものぢや、斯う云ふものはあつても、善い親類は持たたいものぢや、と、よくある筈の、さうした批評は、よほど物羨みの下等な人達の外、めつたに云ひふらすものもありません。今では最う里子は嫁とは云へ、立派な主婦で、一家を切り盛して行くだけの腕も資格も十二分に備はつて居るのです。だが里子は今だに、自分の一存だけでは家事の一切を取りきめようとはしない、些細な事まですつくり舅姑に相談するのです。
 『新見の奥さんは、未だお風呂を沸すにまで一々伺ひを立て、してですつて』

『さうまでせねばならんのかね』
 或る者は斯う嘲笑めいた事を云ひもする。だが里子は矢張り
 『おつかさま、今日お風呂を立てませうかねえ』
 とたゞの一度も訊かないでした事はあまりせん。
 『十二人の子供の親にもなつて、如何に自己意識がないからつて、餘りだ、馬鹿馬鹿しい』
 私は現に私の従妹が、斯う里子を罵倒するのを聞きもしましたが、里子は果して自己意識のない、世間一般の、ボヤツとしたたゞの女でせうか、古き女の代表者としての好模型、嫌々ながらなるやうになり、されるやうにされて、飽くまで自己の存在に氣のつかないで居ると云ふ、さうした女なのでせうかしら？

の辛抱強い性格から云つても確實です。ですが辛に里子は戀を知らなかつた。どうせ一度は嫁ぐんだ、よしや門地が如何あらうと、馬鹿でなく破産破漢で無い限り、眞人として差支ない筈だ、彼女が斯うも思つたらう。嫁いで後も、賢明な彼女はよく剛を制すの金言を知つて居て、巧に自己の抑制にとめたらしく思はれるではありませぬか。
 併しこれは或は、私自身の解釋で、全くの里子には、それ程深い、ハッキリした意識はなく、たゞ運命に盲従して行つたばかりの女なのかも知れませぬ、假りにさうした處で、彼女半生の、行から来たその結果は如何？あたりに自覺が如何の、自己意識が如何の、覺醒が如何のと、さうした武器を置向に振りかざし、そしなかつたけれど、家庭に於ける里子は確かに、理想の境遇にあるではありませぬか。
 『お風呂を沸しませうか』
 斯うした些事位どうでもよしい、それで一家が平和に行くものなら、さうした事はすん／＼舅姑の喜ぶやうにして置いて、私は大局の上に於て家庭の女王でありたい。その意味から全く、里子を偉いと思ひます。

否々、私はさうは思ひませぬ
 結婚以前、里子が戀を知つて居ましたなら、彼女はたとへ隣組に泣いて頼まれたつて、どうして容易く嫁ぐべく承諾はしなかつたのでせう。それは里子